



群馬県コンクール 金賞

「米作りを始めて思ったこと」

太田市立生品小学校 6年 岡田 史弥

ぼくのおじいちゃんは米作りをしていて、ぼくは小さい時からその様子を見たり、種まきの手伝いをしてきました。でも、たまに手伝うだけだったので、いつの間にか大きくなる稲の様子をもっと知りたいと思っていました。

今年、ぼくは田植えの手伝いも出来ました。すると苗が少し余っていたので、チャンスだ！とおじいちゃんにお願いしました。

「ぼく専用の、小さい田んぼを作れないかな？」

すると、おじいちゃんはいいぞ！と、自宅近くの畑に、ぼくの田んぼスペースを分けてくれました。たたみ一じょう分くらいの広さです。お父さんとそこを耕してブロックで囲み、水をたっぷり入れて、足ぶみで代かきをしました。苗を手で植えました。四十株くらい植えたら、もう腰が痛くなりました。おばあちゃんが、

「昔は、家族や近所の人が集まって、みんなで全部、手で植えたんだよ」

と、言いました。おじいちゃんは広い田んぼを田植え機で植えることができ良かったです。広い田んぼに手で植えていくなんで、体があちこち痛くて、どんなに大変だっただろう、と思いました。

学校から帰るとすぐに、田んぼに水をやります。雑草が生えていたら抜きます。稲に虫がいたらやっつけます。雨でもなければ毎日ですから、暑いし、とても大変です。

でも、がんばって続けていると、稲が毎日すくすくのびているのが分かります。稲は分けつ、という枝分かれをすることもおじいちゃんに教わりました。数えてみると、六月に田植えをしたとき一本だった茎が三か月たって、八から十二本くらいに増えていました。長さは十五センチくらいだったのが、八十センチくらいになりました。すごく元気なこい緑色で、風が吹いても負けずにシューっとのびています。五月の種まきの時、いつも食べている一つの米粒だったのに、そこから芽を出して、夏になってこんなに大きく育て、お米はすごい植物だと思いました。

そうすると、毎日食べている、おじいちゃんの育てたお米がいつもよりおいしくて大事に思えてきました。ぼくのお米がどんなふうに実るか、どんなにいいか、とても楽しみです。

